

英太郎のマンション

ピンポンとチャイム

英太郎、出ると。

そこに立っている亜紀。

英太郎「！」

亜紀「よ！」

同・中

英太郎の部屋に亜紀が来るところ

亜紀「なるほど。ウワサどおりね」

英太郎「え？」

亜紀「見に来てあげたの。受験生のお部屋」

差し入れの、お菓子、差し出す。

英太郎「(少しだけふざけて) どうも、お気遣いいただきまして」

亜紀「(こちらも調子を合わせて) いいえ。どういたしまして」

英太郎「オ、これがうわさのたっプリンか」

亜紀「意外といけますよ」

英太郎「お茶でも入れましょうか」

亜紀「言い。すぐに帰るから」

英太郎「まあ、そう言わずにさ」

亜紀「ホントにいい・・・」(ちよつと真顔になる)

英太郎「どうしたの？」

亜紀「え？」

英太郎「なん化、用があつたんじゃないの？」

亜紀「あつた。色々言いたいことが山ほどね。ココに来るまで、アタマの中で・・・

そうよ、それこそ論理検証の嵐！ああ言つてやろう。こう言つてやろうって」

英太郎「なんかそれ。ちよつと恐怖かも」

亜紀「でもさ。英太郎の顔見たら、全部、馬鹿馬鹿しくなっちゃった」

亜紀、ちよつと笑う。

英太郎「なんだよそれ」

と、英太郎も笑う。

二人、なぜだか心がなごんでいる。

亜紀「鹿児島にね、行ってくる」

英太郎「え？」

亜紀「小松原先生のご両親に会いに」

英太郎「長者番付の？」

亜紀「(なぜか笑ってしまう)そ。長者番付の。なんで知っているのよそんなこと」

英太郎「オレは亜紀のことなら、なんだって、お見通しき！」

と、おどけてみせるが、少し悲しい英太郎。

英太郎。

亜紀。

お互いに、淋しさが押し寄せつつ

亜紀「アタシと英太郎って、なんだったのかな」

英太郎「え？」

亜紀「何年つきあっても。同じところグルグルまわってただけみたいな気がする」

英太郎「アキ・・・」

亜紀「どんだん、年ばっかり取っちゃってさ。だけど、ずっと子供のままで、いたくて」

英太郎「・・・」

亜紀「たぶん似たもの同士だったのよ。アタシたち」

英太郎「・・・似たもの同士」

亜紀「だから、結婚できなかったのよ」

英太郎「・・・」

亜紀「リュウとチヨが、新しい命を授かって。そのことで、大人になっていったみたい
に」

英太郎「・・・」

亜紀「アタシだって、大人にならなきゃって思ったの」

英太郎「・・・」

亜紀「色々ありがとね。楽しかった。英太郎という時が、アタシが一番楽しかった！」

そう言っ、出て行こうとする亜紀に。

英太郎思わず、

英太郎「後悔は先に立たないと決まっているぞ！」

亜紀「(後ろを向いたまま) そうよ、後からするから後悔っていうのよ」

英太郎「おしいな。あと一年待てば、弁護士夫人だぞ！」

亜紀「別に弁護士夫人になりたいわけじゃ、ないもん」

英太郎「オレの、肩マッサージが恋しくなっても。人妻になったら肩なんか触れないぞ」

亜紀「もう、肩こるようなこともないでしょ。たぶん」

英太郎「あのさ・・・亜紀」

と、言いかけた時、亜紀、急に振り向く。

亜紀「(真顔で) 英太郎！」

英太郎「え？何」

亜紀「私が結婚しても！試験、頑張るのよ！」

英太郎「(思わず)・・・ハイ・・・亜紀」

亜紀「え？」

英太郎「おめでとう」

路上

カツカツと歩いていた亜紀。

立ち止まって・・・

英太郎のマンションを振り返る。

亜紀「・・・」

と、また歩き出す